

# 人文科学の新たな方向性を議論

27 - 28 第1回日本文化デジタル・ヒューマニティーズ国際シンポジウム

立命館大学の文部科学省グローバルCOEプログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」は、2月27日から2日間の日程で、第1回日本文化デジタル・ヒューマニティーズ国際シンポジウムを開催した。

同拠点の2年間の活動成果を発表し、海外の研究との交流を図る目的で開かれたこのシンポジウムでは、人文科学研究に対する最新情報技術の様々な応用をめぐって日米欧研究者の熱心な議論が交わされた。

## GIS革命の意味を提起

シンポジウムは、1日目に「デジタル・ヒューマニティーズとは何か？—現在と未来—」と題して国内外の研究者の発表と討論が、2日目には若手研究者海外派遣の成果報告などが行われた。

1日目の第1部は拠点の各研究班のリーダーが成果の発表を行った。

最初に登壇した歴史地理情報研究班リーダーの矢野桂司教授は、「地理情報システムとデジタル・ヒューマニティーズ：革命か発展か」と題して全体の基調ともなる興味深い提起を行った。矢野教授は、戦後の地理学における2つの情報技術革命——1950年代後半の計量革命と80年代後半のGIS革命——が地理情報科学という学際研究分野を創出したプロセスを概観し、そこからデジタル・ヒューマニティーズの展望に言及。それ自体が新たな学問分野として自立するというよりも、人文科学と情報科学との連携を深め、各分野の研究の新たな進化を図る役割を担う方向が示唆された。

続いて、京都文化研究班からは近世風俗絵画のデジタル・アーカイブ化における問題について、日本文化研究班からは浮世絵研究におけるWeb画像データベ



スの活用について、それぞれ報告があった。また、デジタルアーカイブ技術研究班はモーショキャプチャを利用した無形文化のデジタルアーカイブ化の試みを紹介。Web活用技術研究班はセマンティックWeb技術が拓くデジタル・ヒューマニティーズの新たな可能性について提起した。

## 文学GISの可能性を示す

第2部では、デジタル・ヒューマニティーズに携わる海外の研究者からの報告が行われた。中でも、英ランカスター大学上級講師のイアン・グレゴリー氏は「ヒューマニティーズに於ける場所」と題して、文学研究といった新しい分野に対するGISの応用可能性について提起。鍵になるのはテキストに対してGISを使えるようにすることだとし、実際に膨大な文例集積をGISにコンバートする手法を示して注目された。



また、メリーランド大学からはデジタル・ヒューマニティーズ・センターの活動報告、ヘルシンキ大学からはセマンティックWeb2.0ポータル先進的な取り組みのデモ、ロンドン大学キングス・カレッジからは文化遺産をめぐるヴァーチャルな研究環境の構築についての紹介が、それぞれ行われた。

その後は、発表者全体でデジタル・ヒューマニティーズの今後の方向性について意見を交わした。